



父がいる。

クローゼットを開けると、父の匂いがすっと広がる。静かに並ぶ、あるじのいなくなったスーツたち。父が他界して一年。残された家に一人暮らす母としては、整理するのも寂しいのだろう。父の書斎は、当時のままだ。

「今日は遅くなるよ。大事なお得意さんと会わなきゃならないんだ」

朝からちよっと張りつめた面持ちで出かけていった父。

「じゃあ、がんばれよ。まあ落ち着いてやれば大丈夫だ」

受験に向かう僕を、薄暗い早朝、空港まで車で送ってくれた父。

「おーい、おみやげ買ってきたぞ」
上着を肩にひっかけ、酔って上機嫌で帰って来た父。

「今日行く店は、なかなか予約取れないんだぞ」

会食と称し、いつも自分だけ美味しいものを食べている贖罪か、たまに家族を

外食に連れていってくれた父。
やはり墓前よりも、ここでこうして

スーツやブレザーを見ているほうが、父がありありと蘇ってくる。

最後に着ていたものだろうか。

ハンガーラックには、コートが掛かっている。カシミアの柔らかな手触りが心地

いい。試しに羽織り、鏡の前に立ってみる。袖と丈は少し短い、そこを伸ばせばちょうどいいか…。

「お、似合うじゃないか。

でも、お前には

ちよっともったいないな」

父がいれば、そんなことを言って笑いそうだった。親譲りのコートなのに、悪くないか。

「あなた、そろそろ行きましょう。道混んでるみたいだから」

階下から妻の呼ぶ声がする。

じゃあ父さん、また来るよ。
コートもらってくれ。

僕はゆっくり、書斎の扉を閉めた。

「またな。仕事、無理するなよ」
心の中の父は、そう言って微笑んだ。

生き方を、包む。

D'URBAN

www.durban.jp

アザーストーリーもWEBで公開中。 [生き方を包む](#)